資料紹介

井上雅由「絵入毛筆日記」を読む

坂尻麻子・吉葉愛

一　はじめに

井上雅由氏（以下敬称略）によって書かれた日記資料は、平成二十五年（二〇一三）六月に雅由の三男である井上恵央から寄託を受けたもので、段ボール箱一〇箱にも及ぶこれらの資料は、雅由が五三年間書き続けた「絵入毛筆日記」である。

昭和館が受け入れた日記は、昭和十年（一九三五）から三十三年までに書かれたもので、総数四八五冊となり、年ごとの内訳冊数は〈表1〉のとおりである。現在は、寄託を受けた全ページの資料撮影が終了し、中性紙箱にて保存している。

本稿では、雅由が書いた昭和十年から二十年までの日記を取り上げ、今年は戦後七〇年という節目でもあることから、とくに昭和二十年の終戦前後にみられる日常生活を紹介していきたい。

表1　昭和館が所蔵する井上雅由日記の年代別冊数数

年代	冊数
昭和10年	1
昭和11年	1
昭和13年	3
昭和14年	2
昭和15年	7
昭和16年	17
昭和17年	2
昭和18年	5
昭和20年	6
昭和21年	39
昭和22年	28
昭和23年	24
昭和24年	34
昭和26年	44
昭和27年	26
昭和28年	40
昭和29年	34
昭和30年	50
昭和31年	51
昭和32年	49
昭和33年	19
その他	3
合計	485

二　井上雅由について

本名、井上隆正。明治二十二年（一八八九）九月十九日に東京市麹町区富士見町一丁目三十四番地（現・千代田区）で誕生し、昭和三十三年（一九五八）五月三十一日に千葉県市川市で心臓病のため満六八歳で亡くなった。亡くなる直前の五月二十四日まで日記はつづられている。

日記は、杵屋（杵の屋）長小事井上雅由という名で書かれており、これは隆正が生業としていた長唄の名取名である（以下、日記にならい雅由とする）。

大正十二年（一九二三）九月二日の関東大震災で自宅を焼失し、その際、日記約五十冊を失った。同年十二月、雅由は三四歳で東京市下谷区（現・台東区）練堀町五一番地に呉服・ゆかた・手拭いの製造卸を営む「井上文化店」を開業する。昭和十九年十月には静岡県駿東郡高根村（現・御殿場市）へ一部の日記とともに家族で疎開している。二十年三月十日の東京大空襲で自宅を再び焼失、この時日記を二百二十冊失うも、荷

物疎開をしていたため同年七月の時点では二百四十冊が罹災を免れた。二十一年二月には千葉県市川市で再開業する。雅由は「井上文化店」を営む傍ら、北海道から九州まで日本全国を旅してまわり、さらには、台湾、樺太、満州にも渡ってその土地の風土、食事、人々との交流を書き続けてきた。

三　「絵入毛筆日記」について

雅由は一八歳の頃（明治三十九年）より日記を書き始め、昭和二十年七月十八日の日記（口絵④　口絵参照）には「明治卅九年十八歳より今日五十七歳まで四十年間書き続けたる絵とおしゃれ都々逸入り日記帳五百冊」との記述がある。

寄託された日記はそのタイトルから以下の三種類に大別できる。

「日記祭」

「風せん旅行―人情風俗裏表スケッチ」（昭和二十年七月頃からは「人情風俗誌」とタイトルが変わる）

「家庭重要記録」

日記原本は、前述の二十年七月十八日付の焼失を免れた日記帳明細によると、明治三十九年から四十三年および大正三年は自製の日記帳、大正十二年から十四年までは博文館が販売する『当用日記』が用いられている。雅由の「第一回日記祭」では、「初めは自製の日記帳でありましたが十年ばかり立ちますと博文館の日記帳が世に出ましたので夫れ以来今日迄毎年買求めて」いたという。最も早く日記帳を商品化した博文館は大正八年には二十種類にも及ぶ日記帳を出版しており[1]、他社の製品も含め明治時代末期から大正期にかけて日記が人々の生活に浸透しはじめた時期であった。雅由は博文館とも交流があったとみられ、「第一回日記祭」には博文館の日記係であった人物との手紙が貼付されている。また、昭和二十年、二十一年の日記帳は自製の日記張に書かれており、この表紙は餅菓子店で使う上和紙包み紙を入手して作製したことが記されている。

寄託資料のうち最も古いものが「第一回日記祭り記念」と書かれた資料で、昭和十年二月十一日六時より自宅で開催した日記祭りと座談会の記録綴りである。日記中に貼付された新聞記事[2]によると、この日記祭りは一八才歳より書き続けた日記が、満三〇年になりこれを機会に日記中に登場したさまざまな故人の霊を弔うという主旨で開催されたことがうかがえる。日記祭りの案内には、

日記に依って徳を得ました事は非常なものであります元来私は長唄業と手拭商の二ツの営業税を納めて居りますがその業の発展も全く日記に依るものでありますが今日日本全国の名所みやげ手拭の図案は皆日記によって習得せし自作でよくいえば日記でおぼえし絵が商売となった訳です

この日記祭りは年に一回、紀元節の日に開催され、参加者は、毎年三十～六十名程度であったようである。昭和十一年の第二回日記祭からは案内状の冒頭に「我がために記す日記も国の為」の一文が記されるようになり、昭和十三年の「第四回日記祭」以降は戦死者名簿供養が合わせて

行われている。雅由は全国を旅する傍ら、各地の戦死者家族を見舞い、戦死者の戦歴や写真などをスケッチしてまわっていた。「第四回日記祭」では、三一名の戦死者名が記されており、その案内状には日記に登場した人々が一万人以上に達したことが述べられている。さらに紀元二千六百年を記念した昭和十五年の「第六回日記祭」では、集まった同志で皇紀にちなんだ日記報国団体「好記会」を結成している。

日記祭りでは、当初会食などが井上家で用意されていたようであるが、昭和二十年になると、開催案内状には「警報発令の節は解除後即刻開始」や「米、炭、醤油、砂糖、其他の材料何か融通のつきます物少量お持ち頂けば幸です御手酒も歓迎致します」の記述があり、戦時下の物資不足のなかでの生活を垣間見ることができる。二十二年に千葉県市川市に転居してからは「日記祭」の日記帳がないため、おそらく、昭和二十一年二月十一日に開催された第十二回が最後であろう。

① 左 井上雅由(51歳) 第6回日記祭(昭和15年2月11日)にて

② 第6回日記祭(昭和15年2月11日)の様子

昭和二十年までの日記のうち、最も多い冊数を占めるのが、「風せん旅行—人情風俗裏表スケッチ」(のちの「人情風俗誌」)で、手拭い商の営業を兼ねて各地の知人、観光名所を巡った記録である。雅由は一、二ヶ月に一度「風せん旅行」に出ており、その行程は二週間から一ヶ月程度だったようだ。

昭和十三年八月二十日、この年六回目の「風せん旅行」に出た雅由は、翌二十一日に横浜の松屋百貨店でさっそく自身が考案したモンペの売り込みをしている。その後、旅先では出征旗や千人針、モンペ等の注文を請け負ったようで、二十五日に妻に打ち合わせの電話を入れ、九月三日には埼玉県の深谷に入り、知人を訪問し出征旗と千人針の注文を受けている。さらに翌四日の記録では、深谷町(現・深谷市)の統制政策について述べている。

出征旗の統制で苦しい人情のあらはれ　贈られた大旗二枚を合せて裏表から贈り人に謝意を表している　深谷町酒井理髪店々頭風景

昭和十三年九月四日朝九時半スケッチ

この深谷町では物資節約の見地から大旗の出征旗は一本と制げんされ居るが此の説も最(ママ)もであるが一方の立場から行くと出征軍人許りは一本でも旗の多い程益々積(ママ)任感念が強くなり贈り人の手前なんとか手柄を立てて帰りたいといふ希望を持ち命をかけて出かける身には一本も旗の多い程嬉しひし人の一生の婚礼は命は懸けねど出来得る限り祝いまするといふに反して旗の制限はどうかと思ふ

出征は　ハタの人にはわからない

旗で商売をしている雅由からしてみれば、商売にも関わる問題であったに違いない。

「家庭重要記録」については、主に家族に関する事柄が多く見られるが、雅由自身が区別をして記したかは定かではない。昭和二十年以降は「家庭重要記録」日記はなくなり、「人情風俗誌」「日記祭」の二タイトルのみとなっている。「十八年度第一回家庭重要記録」には「三男朝正入営記念号」として、三男の入営に際し行った祝宴、妻和子と三男朝正と三人で行った身延参りの様子も記されている。

四　昭和二十年「絵入毛筆日記」

昭和二十年の日記は、次の六冊である。

・「昭和廿年度人情風俗誌（其一）」（昭和二十年一月一日～十六日）
・「第十一回日記祭」（昭和二十年二月十一日）
・「人情風俗誌（其十二）　高根の巻」（昭和二十年七月十八日～三十一日）
・「人情風俗誌（其十三）」（昭和二十年八月一日～八日）
・「人情風俗誌（其廿）」（昭和二十年十月十五日～二十二日）
・「人情風俗誌（其廿一）」（昭和二十年十月二十三日～三十一日）

(1)「昭和廿年度人情風俗誌（其一）」（昭和二十年一月一日～十六日）

まず、昭和二十年元旦である。冒頭「空襲に明けし元旦」で始まり、前日の大晦日の様子から記述されている。昭和十九年の大晦日から一家は、いざという時にすぐ起きられるようにと鉄かぶと等の身支度をして就寝している。警戒警報発令と同時に飛び起きて、外へ出たが、焼夷弾落下と同時に南風が吹き出して井上家付近は助かったとあり、当時の緊迫した空襲下でのくらしぶりがよく記されている。

雅由の日記には、長唄を嗜んでいたこともあり、必ず「おしゃれ都々逸」と題した唄が添えられているのだが、この日の唄は「あんかんと、寝てるか、寝れるか、空襲夜明　見るも勇まし鉄かぶと」というものである。

大晦日から元旦にかけての東京の空襲は、〈表2〉のとおりで、日記に記されている記録と一致している。

その日の午前九時に静岡県熱海へと日記を疎開させるのために五七冊の日記帳を携えて出発し、熱海来宮(きのみや)神社に預けている。その後も、日記疎開のために熱海・伊東を頻繁に訪れており、空襲の激しかった東京下で、多くの日記が焼けずに残っていた理由はここにある。

来宮神社での初参りの様子も描いているのだが、連日の空襲に見舞われる東京とは異なる土地の人々を目の当たりにして、東京での空襲が夢

のようで、同じ日本でも東京と熱海ではこうも違うものかと不思議の感にうたれている。

その夜は、温泉にも浸かり、昨年十一月二十四日の帝都空襲から一夜としてゆっくりと湯に浸かることができず、約四十日ぶりにゆったりと入湯できたことに嬉しさを感じたとある。就寝時は、久しぶりに防空服装を脱いで浴衣丹前で寝たため、一夜明けて風邪を引くといった珍現象を呈したとあり、空襲の最中でありながらも、ふと笑いのこぼれる日常も記述されている。（写真③）

表2　12月31日と1月1日の東京空襲の記録

昭和19年12月31日

警戒警報発令	21時42分
空襲	21時44分
警戒警報解除	22時10分
警戒警報発令	23時50分（1月1日に継続）
気象	気温2.3度　風速1.4メートル　風向北
来襲機数	B29が1機

昭和20年1月1日

警戒警報発令中	12月31日より継続
空襲	0時30分
警戒警報発令	4時50分
空襲	5時15分
警戒警報解除	5時25分
気象	気温1.7度　風速2.1メートル　風向南南西
来襲機数	第1次B29が1機、第2次B29が2機

『東京大空襲・戦災誌　第3巻』、昭和50年3月、財団法人東京空襲を記録する会

一月三日昼、伊東町の路上で熱海の杉森光樹君入営の千人針をお願いしている女性に遭遇。通常、女性が縫うものだが、「縁起男ですから縫はしてください」と懇願し、「戦死する事は絶対にない」とのサインや記念揮毫を行って、一針縫っている。これが二度目の千人針だったようだ。この日のおしゃれ都々逸は「伊東（糸）の縁、千人針をば、男が縫えば、断じて（男子）戦死を免れる」である。

一月四日には、前日伊東で入手した大根等の食糧を携えて午後五時頃

③　昭和20年元旦の日記

に帰京。すると、七時には警戒警報が発令され、ただちに防空用意にとりかかっている。三十分程度で解除となったとあるが、帰宅するや否やの警戒警報に出迎えられ、疲労困憊している。

その後も日記には、警戒警報発令、空襲警報発令、空襲等といった言葉が頻繁に登場し、昭和二十年の度重なる空襲の激しさを感じさせる。当初、手書きであった「空襲警報発令」等の文字であったが、七月の日記では、印に変わっている。（写真④）

（2）「人情風俗誌（其十二）」（昭和二十年七月十八日～三十一日）

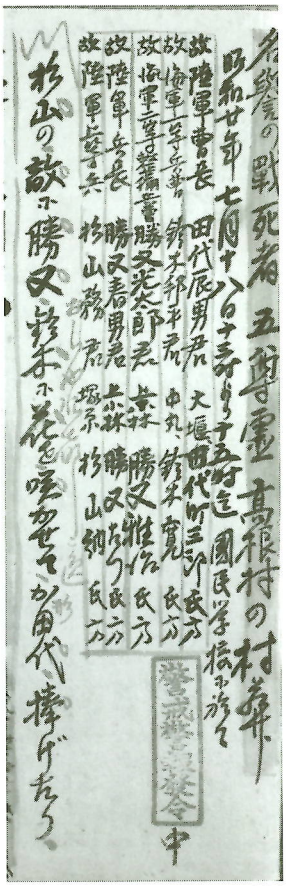
この期間の日記は、すべて疎開先であった静岡県駿東郡高根村（現・御殿場市）での記録である。

七月十八日、午前九時から十時半まで故海軍一等兵曹の葬儀、午後一時～三時までは、国民学校にて行われた戦死者五名の村葬に参列している。警戒警報発令中、空襲警報発令中の押印があり、空襲下での葬儀の様子が描かれている。この日のおしゃれ都々逸は「敵米は、ドカンドカンと、艦砲射撃、やれど、皇民、どかん気だ」。（写真⑤）

七月二十二日には、東条内閣時に三百七十余俵供出して日本一の自作農として総理大臣賞を受け、決戦鏡として人々に尊ばれている豪農が紹介され、その姿が描かれている。

七月三十日には、B29と艦載機による大空襲の様子が記録されている。「焼夷弾落とした！」「硝子、硝子が」と叫ぶ人々、「小山が燃えだした」「御殿場へ落とした」と叫んでいる間に高根村役場付近にも投弾され、役場の硝子戸が破れ、誰それが掃射で死んだ等、続々と情報が入ってくる。一番猛烈な大爆音が続いたのは、午前七時半と記述されている。この日の空襲は、主に駿東郡小山町にあった富士紡工場をねらったもので、死者一八名の被害をだしている。[3]

日が落ちてから疎開荷物が届いているのだが、警報が明けたため提灯を点けることが出来て幸せだ、とあり、灯火管制下の不自由さを垣間見ることができる。



④ 手書きの警戒警報発令（昭和20年1月4日）（左）と警戒警報発令の印（昭和20年7月18日）（右）

⑤　昭和20年7月18日

（3）「人情風俗誌（其十三）（昭和二十年八月一日～八日）

八月一日、勝札一〇枚を買い求めている。実際は、東京にいる長男が買い求めたものを分配してもらったのである。一枚一〇円で合計一〇〇円。欲ばかりを考えず当たらなくても「献金したと思って居れば好いのである」と記している。日記には、勝札の広告と券一枚が貼付されている。（写真⑥）

八月二日夕方から、高根村の疎開宅を訪れた息子夫婦とともに伊豆長岡の古奈温泉白石旅館に二泊している。温泉の風呂では、見知らぬ人とも「おはようございます」と挨拶を交わすのが礼儀だが、この頃は「戦争はどうなりますかね」という言葉が挨拶代わりになっている。「勝ちませんね」「それじゃ負けるんですか」「負けませんね」「それじゃ、どうなるんですか」と聞かれた井上の感想は、「現在は残念ながら負けているが、心は勝っている。焼かれてたたかれて裸体になっても、降参等は夢にもしないで頑張り続けると、米英も国内でごたごたを生じて戦争に嫌気を来たし、交和を申し込んで来ると言った具合、先づ長い事は無いと思ふ。而し、日本が世界一になるのは未だ十年、二十年以上かかると思ふ落ちつけ国民よ嘆ずるな風呂へでも這て尻でもあたためて頭に水でも冠って冷やして落ちつけ落ちつけ」である。夕食には、分厚いビフテキ、サワラの照り焼き、鮪のさしみ、おじゃがと青い物のうま煮、トマトといった戦前のご馳走が並び、「戦局苛烈のさなか一場の夢物語」に感激している。（写真⑦）

八月五日から急遽東京へ戻ることになり、午前一〇時に御殿場駅を出発して新宿に向かう。正午頃、途中の座間駅で敵機来襲のため避難下車を命じられ、木陰や草むらに身を隠すが、再び乗車し、発車。午後五時頃には新宿駅に到着している。日記には「P51八十機關東地區來襲」見出しの新聞記事が貼付されている。

新宿駅では、乗客が降りきらぬうちに、二十人ほどの軍人の一部が先

を争って乗車しようとしたり、窓から飛び込み、大きな荷物を押し上げようとする姿を目にして、「軍人のくせに何事だ。人民を保護すべき立場で居ながら此の秩序を乱すのは怪しからん。降客全部が降りてから乗り給へ」と一喝している。

⑥　8月1日の日記

また、神風特攻隊員を募る呼びかけをしている血気盛んな学徒特攻隊員と応援の娘の姿や勝札の街頭宣伝をする新宿三越支店長らの姿等についても記録されている。

八月六日には「廣島市に都市破壊殺人爆弾投下」と題して、その様子

⑦　昭和20年8月3日の日記

が描かれているが、あくまでもその後の報道等から想像して描いたものであろう。広島原爆投下の報道状況は、八月七日一五時三〇分の大本営発表が「一．昨八月六日広島市は敵B29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり」「二．敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり」、八月八日付朝日新聞の見出しは「敵の非人道、断乎報復　新型爆弾に対策確立」である。（口絵⑤　口絵参照）

（4）「人情風俗誌（其廿）」（昭和二十年十月十五日～二十二日）

雅由は、日本土産品協会の理事を務めており、進駐軍の物産土産品の研究や各都市の商工経済会を訪れるため、十月十六日に東北旅行へ出発している。行き先は、松島→塩竈（一泊）→仙台→山形（一泊）→秋田（二泊）→後三年（一泊）→飯坂温泉（一泊）→福島等であり、各駅の発着時間等も克明に記録されている。

まずは、仙台駅に到着。東京と同じ焼け野原が広がる駅前で、乗車券購入者や新聞を買い求める客の長い行列を描いている。進駐米兵の姿はなく、地元の人曰く、塩竈・松島方面にいるので昼頃にならないとこの付近で目にすることはないらしい。東北地方の進駐開始は、昭和二十年九月十五日に横浜を出発したのが第一陣で、仙台に司令部を置いた第一四軍団は九月十五日に塩竈に上陸している。

その後、松島、塩竈へ向かう。松島では、稲葉屋物産店を数年ぶりに訪問し、「こけし」の大家である鈴木育三氏に多数の作品を見せてもらいながら談話する様子や海岸で離島の眺望を進駐軍将校と一緒に鑑賞している姿等も描かれている。塩竈では知人である横田呉服店を訪問、夜は松島旅館に宿泊している。

翌日十七日には、再び仙台へ。本塩竈駅の駅長室で今回の旅について説明し、重要旅行だと感心されて揮毫を依頼されている。雅由は、乗降駅で必ずといっていいほど、事務所を訪問し、駅長と談話しているのである。

仙台では、宮城県庁を訪れ、渉外事務処理本部連絡室の主任と会見する。雅由が会長を務める日本土産品協会が日本各地の名産品、平和を海外に広めるために努力をしている団体であることを説明し、宮城県名産である「こけし」の大々的な生産、出荷を要請し、大いに努力する旨の確約を取りつけている。

その後、山形へ向かうために仙台駅へ戻っているが、知人に遭遇し、列車に乗り遅れる等の珍事があり、待合室で日記を描く等して過ごしている。午後四時半の仙台駅発に乗車し七時頃に山形駅に到着。山形では、仙台の待合室で見知りになった方の自宅に宿泊し、秋の初鰤や枝豆、山形名物の柿等の夕食に舌鼓を打っている。

十八日は、午後一時に山形駅を出発し、秋田駅に六時に到着。秋田港の辺りで八月十四日に爆撃があったが、わずかの被害ですんでいる。なじみの旅館は満室で、ほかの旅館に問い合わせしてもらったが、すべて満室という有様。結局、知人で東北屈指の資産家である平野政吉の別邸に宿泊している。

日記には、平野政吉は東北随一の美術品所蔵家で将来秋田市に博物館を建設する歴史的大人物と記述されており、翌十九日には美術品の殿堂である本邸にも訪れている。

平野政吉は、秋田市の資産家で生涯を賭けて美術品を収集した人物である。その収集を助けたのが画家の藤田嗣治であり、ともに美術館の建

設を構想した。着工はしたものの、戦時体制下に建設が中止となり、昭和四十二年（一九六七）五月に平野政吉コレクションの展観を目的とする秋田県立美術館の開館で実現したのである。（写真⑧）

十九日は、秋田県庁を訪問し、進駐軍土産について、秋田名産の樺細工、秋田美人写真等について談義をし、その後、木の内百貨店を訪問。木の内百貨店は、雅由の店である「井上文化店」の秋田美人手拭ハンカチや千人針おしゃれ都々逸、慰問紙等の商品を売り広めている店であり、長年のなじみと書かれている。木の内百貨店とは、秋田市に本拠を置く現在の木内百貨店のことで、明治四十三年（一九一〇）に県内初のショーウィンドー、昭和三十年（一九五五）には県内初のエスカレータを売りにして人気を呼んだ。

二十日は、午前に秋田駅を発ち、後三年駅で下車して金沢町中関（秋田県仙北郡美郷町）へ向かう。宿泊した知人宅では、夕飯に山盛りのご飯、焼き魚、また数々の野菜料理をご馳走になり「東京者には何よりご馳走が楽しみ」との記されており、戦後の東京の食糧不足を感じさせる。

二十一日は、福島に向かい、午後七時半に飯坂温泉に到着し、若喜旅館に宿泊する。持参した三合の米を出して、一泊一一円三五銭という格安料金となり、チップを含めて宿泊代は金二〇円。若喜旅館は、平成六年（一九九四）に本館火災で死者を出し、平成十九年（二〇〇七）まで廃墟となっていたが、現在は取り壊されて別施設となっている。

二十二日は、福島県庁を訪問し、他県同様に進駐軍土産について懇談している。郡山に向かうため、午後には福島駅を発ち、「日米親善風景」と題して、二等車の車中での進駐軍兵士との談笑を描いている。（写真⑨）

⑧　昭和20年10月18日

（5）「人情風俗誌（其廿一）」（昭和二十年十月二十三日～三十一日）から

十月二十五日に静岡県駿東郡北郷村（現・小山町）へ向かう。車内はいつも、大きな荷物を背負った人々で混雑しているようである。車中の

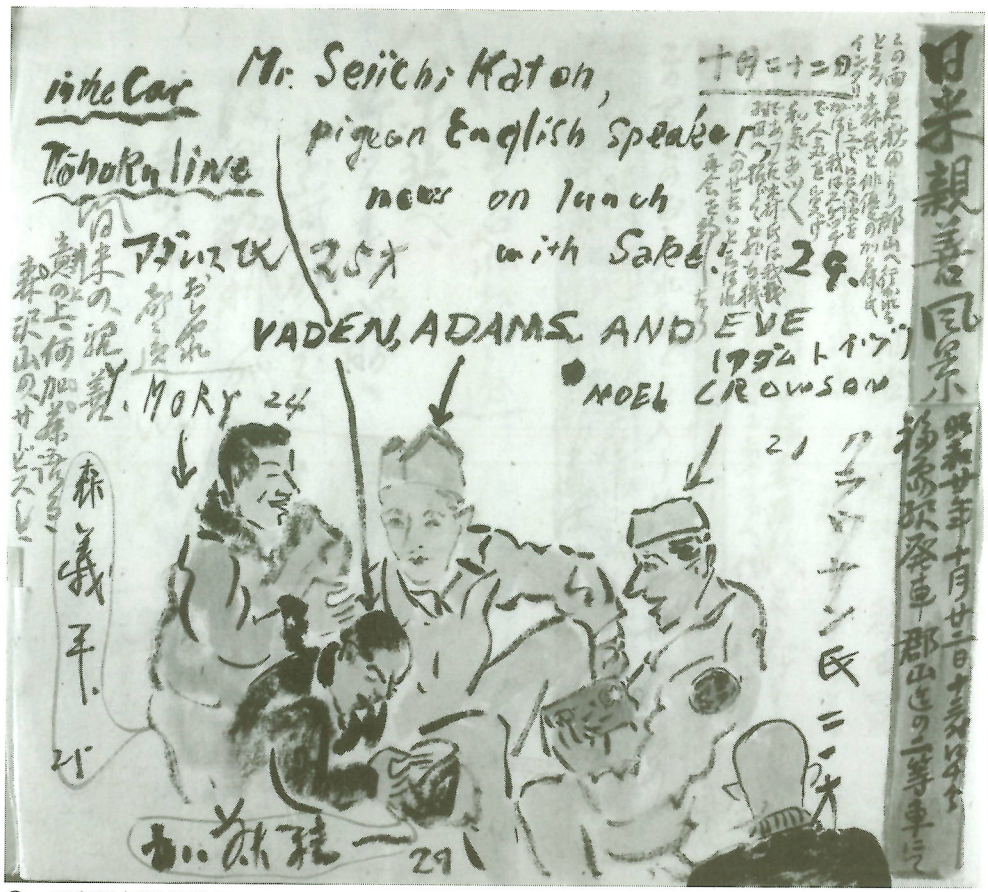
客に、千葉の一部ではさつま芋一貫を三円でどしどし売ってくれると打ち明けられ、先日の旅行で行った山形方面では、さつま芋五円であったが、白米が一升五円から最高二〇円だったという話しをすると、安い相場に感激されたとある。この頃の物価高を表す記録である。昭和二十年十月の警視庁経済第三課の調べによると、白米（一升、一・五キロ）の基準価格は〇・五三円、ヤミ価格は七〇円、さつまいも（一貫目、三・七五キロ）の基準価格は一・二〇円、ヤミ価格が五〇円である。

翌二十六日には、再び東京に戻り、二十八日の日曜日には、千葉方面へ買い出しへと出かけている。午後三時頃の両国行き列車で人々が鈴なりに乗車している様子が描かれている。屋根の上まで人の山で、幾車両も連結した貨物車の中へも、窓からも我先にと飛び込むその勢いの凄まじさが記述されており、「食ふための、買出し部隊が、半ばをしめる、い屋根（イヤネ）成るほど、人の山」という都々逸が添えられている。芋の里旭町（現・旭市）の知人宅では、一貫目三円の甘藷をご馳走になり（雅由の疎開先である駿東郡のものより美味しいのこと）、旭町は、東京人に一貫目二円五〇銭以下でも売ってくれる情けの里だと言っている。

二十九日には帰京の予定だったが、戦乱状態の大混雑と汽車の遅延で帰京できず、豊里（現・銚子市）の松月旅館に宿泊。翌日、約四貫五円程度でもらい受けた野菜を背負って、豊里駅から成田駅まで向かい、そこから上野までの貨物車で帰京している。（写真⑩）

五　おわりに

雅由の日記は、自分の内面を記したり、自分との対話といった要素をもつ日記ではなく、出来事を克明に記録し、描いている。昭和十六年二月十三日の大阪新聞夕刊では「日記礼讃家」として紹介され、自ら日記祭りを開催するまでに至った雅由にとって、日記とは何であったのか。



⑨　昭和20年10月22日

⑩　昭和20年10月28日

関東大震災によって自宅を焼失し、日記の一部も焼失し、「もう日記は書くまい」と思ったが「いやいやこれからだと思って生れ変ったつもりで元気を出し引き続き今日に及」んだという。さらに昭和十一年の「第二回日記祭」では、関東大震災を振り返り、「見舞って下すった人々を今も時々日記をひろげ見て思はず頭を下げる次第でありますがそこに日記の尊い事が頷かれる事と存じます」と述べられている。

戦時中の日記には、繰り返し「警戒警報」「空襲警報」「空襲」といった文字が登場しており、空襲下の緊迫した生活を感じることができる。ただ、前述したとおり、雅由の日記は、出来事を克明に記録しているため、戦時中の悲惨さはあまり感じられない。しかし、それ故に平和な普通の家庭に戦争が否応なしに入り込んでいる様子を伝えているように思う。

〈注〉

(1) 西川裕子『日記をつづるということ　国民教育装置とその逸脱』(吉川弘文館、平成二十一年) 八八頁

(2) 昭和十年二月一■日　切り抜きのため掲載紙不詳

(3) 日本の空襲編集委員会『日本の空襲―四　神奈川・静岡・新潟・長野・山梨』(三省堂、昭和五十六年) 一九二頁